

シモーヌ・シュヴァルツ＝バルト 『奇跡のテリュメに雨と風』におけるシスターフッド

大野藍梨

はじめに

女性として生きることには、かなりのしんどさがつきまとう。毎月の月経と、それに伴うストレスと体調不良、妊娠・出産による体質の変化、あるいは不妊や流産といった子を持たない苦しみ。また、家族の育児や介護を、女性が一手に担うことは往々にしてある。もちろん、妊娠や出産、家族のケアには、何事にも代えがたい喜びや幸せがあるのかもしれない。しかし、女性があまりにも割りを食っているのではないかという実感がある。それに加え、——これは極めて重要なことだが——女性は男性に比べ、性暴力の被害に遭いやすい。

カリブ海を舞台とする小説では、黒人女性が奴隷船上で強かんされた結果、娘が生まれたり、母親が娘を置き去りにして男と出奔してしまうというように、通常の家系モデルがはじめから破綻していることが多い。その母親の欠如を埋めるのが、祖母であり、「ケンブワズール *quimboiseur*」と呼ばれる魔女の様な女性である。

奴隷制社会やその後も圧制の続くポスト奴隷制社会を描いたカリブ海文学において、女主人公たちは、権力の側からすり抜けるべく様々な「抵抗」を行う。反乱や逃亡、家畜殺し、ダンスや面従腹背といったものである。このような抵抗の実践は、女性どうしの友情によって支えられている。奴隷たちのキャンプにおいて、食べ物を分け合い、女性の身体にまつわるケアをし、ダンスや薬草の知識を教え合う。また、祖母や魔女の教えは、女主人公の精神的支柱となっている。

黒人奴隷であったり、魔術が使えるからといって、カリブ海文学の女主人公は何も特別な存在ではない。奴隷制や植民地支配が終わったとされる現在においてもなお、圧制に苦しみ、経済的搾取を強いられている人びとは大勢いる。また、黒人奴隷やその子孫である女主人公たちを、単なる哀れな犠牲者像という見方から救い出したいと思う。過酷な日常の中にあっても、彼女たちは、何らかの楽しみを見つけ、家族や恋人、友人と気持ちを通じ合わせていたのではないか。私たちがだって、彼女たちの家族や女友だちになれるのではないか。

シモーヌ・シュヴァルツ＝バルト Simone Schwarz-Bart (1938-) の『奇跡のテリュメに雨と風』(以下は、『奇跡のテリュメ』と略する) *Pluie et vent sur Téliumée Miracle* (1972年) は、女性どうしの愛情や友情で結ばれた、シスターフッドの関係を描いた小説として読むことができる。母の出奔により、祖母やその友人で魔女のマン・シーアによって養育された女主人公テリュメは、祖母らとの共同生活で培った知恵を後半生の糧とする。ところで、作者シモーヌが幼少時代を過ごし、また『奇跡のテリュメ』の舞台となるグアドループとは、どのような場所なのだろうか。女主人公テリュメの独白から始まる『奇跡のテリュメ』の冒頭をみてみよう。

国はたいい人の心次第。心が小さければ国も極めて小さいし、心が大きかったら国も広大。私は自分の心が大きいとは言えないが、決して自分の国の狭さに悩んだことがない。もし誰かが再び選ぶ能力を私に与えてくれたら、まさにここ、グアドループで、再び生まれ、苦しみ、そして死にたい。そう遠くない昔に、私たちの祖先が奴隷であった、この火山の、台風のある、蚊のいる、いやなこの島で。しかし、私は世界の悲しみをはかるためにこの世に生まれてきたのではない。死が私に訪れて、夢の中で私のすべてを取り去っていくときまで、私の年の他の女性たちのように、庭に立って、何度も夢見ることを私は好む¹⁾。

この冒頭部から、グアドループの地理や熱帯の気候、奴隷制がかつて布かれていたことがわかる。職業軍人の父と小学校教師の母の間に、フランス本土のシャラント・マリタイムで生を享けたシモーヌ。生後3か月で一家は、両親の故郷であるグアドループに移り住む。カリブ海に位置する、蝶々の形をしたこの小さなグアドループ島は、近隣の島マルチニックとともに、当時フランスの植民地であった。幼いシモーヌは、ファノットと呼ばれていた老女の家を頻繁に訪れ、ファノットによる口頭伝承に早くから触れていた。しかし、ファノットとの夢のような子ども時代もやがて終わりを迎える。グアドループの中心地、ポワントピトルで中等教育を終えた18歳のシモーヌは、当時のカリブ海の知識人同様、大学受験のためにパリへと向かう²⁾。シモーヌは、パリ時代を回想し、次のように語っている。

首都は、すべての扉が閉ざされた銀行のように思われました。敵意のある世界です。私たちのところでは、扉はすべて開かれていて、私たちは共同体の中で暮らしているのです。(中略) 私が自分の文化を意識したのは、フランスにおいてです。私は実際にはフランス人ではないのだと気づいたのです。私が黒人であることを発見したのは、パリにおいてです³⁾。

シモーヌの語る、黒人ゆえの疎外と黒人としての自己発見についての告白は、マルチニック出身の精神科医・作家、フランツ・ファノンが記した、本土での疎外体験を想起させる。彼は、その著書『黒い皮膚・白い仮面』*Peau noire, masques blancs* (1952年)において、精神分析を用いて、黒人の抱える人種的劣等感とその病理について論じている。そこには、ファノン自身が実体験した、人種的疎外が紹介されている。彼によれば、「故郷に留まるかぎり、黒人は些細な内輪の争いの際を除けば自己の対他存在を意識する必要がない⁴⁾」のだという。ところが、故郷を離れ、フランス本土に渡ったとたん、「ニグロ」であることを理由に忌避され、黒人であることを意識化せざるをえないというのだ。それでは、シモーヌの場合、このような疎外体験をいかにして克服し、想像力豊かな作品の創作へと昇華したのだろうか。

シモーヌは、パリでの生活にカルチャーショックを受けながらも、フレンチカリビアンが集うコミュニティに支えられながら法学を学んでいた。1959年には、同年『最後の正しき人』*Le Dernier des Justes* でゴンクール賞を受賞したユダヤ人作家、アンドレ・シュヴァルツ＝バルトと出会う。翌年結婚した二人は、世界各地を移り住むなか、二人の息子にも恵まれる。ローザンヌ大学で文学を学んでいたシモーヌだが、夫はいち早く妻の文学的才能を見出し、彼女に創作を勧める。他方、アンドレもまた、カリブ海を舞台とする小説の創作に着手するのであった。

夫婦共作で『青いバナナと豚肉のお料理』*Un plat de porc aux bananes vertes*（1967年）を出版した後、1972年には夫婦別々の単著として、グアドループを舞台とする小説を上梓している。夫のアンドレは、1802年のグアドループで起こった、混血女性ソリチュード率いる反乱という史実を題材に『混血女性ソリチュード』*La mulâtresse Solitude*（1972年）を世に出す。この作品は、失われかけた英雄・ソリチュードの物語を、グアドループの集団的記憶として再生することに成功した。一方、妻のシモーヌの『奇跡のテリュメ』は、女性雑誌『ELLE』の女性文学賞を受賞し、英語圏においてフランス語学習教材として広く読まれている⁵⁾。

作者シモーヌによれば、『奇跡のテリュメ』は、子ども時代に、グアドループに伝わるコントやことわざ、歌、さらには人生観について聞かせてくれた、老女ファノット（1968年に死去）に対するオマージュとして書かれた作品であるという⁶⁾。また、この作品は、「エスプリのレヴェルでクレオール語が伝わるように」、シモーヌはいったんクレオール語で書き、それをフランス語に置き替える作業を通じて創作された⁷⁾。『奇跡のテリュメ』はいわば、ファノットの死を機に、子ども時代に彼女から教わった口頭伝承を保存し、再話するための物語である。

『奇跡のテリュメ』は、グアドループのルガンドゥール家という架空の女系一族を描いた小説である。物語の-spanは、奴隷制廃止のあった1848年から、海外帰化（1946年）後の約100年間に設定されている⁸⁾。約100年の間に、曾祖母ミネルヴ、祖母トゥシーヌ、母ヴィクトワール、主人公テリュメ、養女ソノールという5世代の女たちの人生が描かれている。はじめに、ルガンドゥール家の系譜に沿って梗概を説明しておきたい。

残酷な奴隷主から解放されたミネルヴは、ひとまず腰を落ちつけた地で、グアドループの南にある「ドミニカから来た男」の子を身ごもるが、男は行方をくらましてしまう。しかし、ザンゴという男が父親代わりとなって、子どものトゥシーヌを愛情深く養育する。年頃になったトゥシーヌは、漁師のジェレミーと結婚し、女兒の双子をもうけた。その幸せな家庭生活は、周囲の羨望の的となっていたが、双子の一人を火事で失う。哀しみのどん底にいたトゥシーヌとジェレミーであったが、二人の間にヴィクトワールが誕生する。夫亡きあと、「孤独を切望していた」トゥシーヌは、魔女である友人、マン・シアアにいる人里離れた地に移る。ところが、ヴィクトワールは、カリブ族の恋人とドミニカに出奔するのに、娘のテリュメをトゥシーヌに預けることを思いつく。祖母と魔女に育てられたテリュメは、家政術だけでなく、教訓譚や妖術も習得していく。

成長したテリュメは、幼馴染の男性であるエリーと暮らすが、その暴力が原因で、関係は破綻する。その後、彼女はアンボワーズという男と慎ましく暮らしていたが、労使交渉の代表に担ぎ出された彼は、その最中に事故死する。その後、子どものいなかったテリュメは、ソノールという養女を引き取る。しかし、同棲相手のメダールに、養女を拉致されてしまう。養女を拉致され、後裔を失ったテリュメだが、共同体の若い人びとに、奴隷制の記憶や妖術の知識を伝授する存在になることが暗示されている。

カリブ海を舞台とした小説において、主人公が母親以外の人物に養育されるという物語はめずらしくない。主人公の母が、奴隷船の上で白人水夫によって強かんされた結果、生まれた子どもを愛せないというプロットは、アンドレの『混血女性ソリチュード』や、マリーズ・コンデの『わたしはティチューバ』*Moi, Tituba sorcière... Noire de Salem*（1986年）にもみられる。『混

血女性ソリチュード』の主人公の母は、娘を置き去りにして義足の恋人と逃亡するのだが、『わたしはティチューバ』においては、養父が愛情深く主人公ティチューバを育む。奴隷主によって母が殺され、養父が自殺し、ティチューバが孤児になると、魔女マン・ヤーヤが養育し、ティチューバは、薬草や妖術の知識を習得する。また、乳母や女中が主人公の養育やケアを担う存在として登場する作品もある。コンデの『移り住む心』*La migration des cœurs* (1995年)がそれで、その女主人公は、混血の中産階級であるが、そこには、母親代わりとなって彼女を養育した乳母や、一種の同性愛的感情を抱くほど女主人を愛する女中が登場する。

『奇跡のテリュメ』にかんする先行研究では、家庭における男性の不在が顕著であるのとは対照的に、強固な女性どうしの関係がみられることが、既に指摘されている。カスリーン・ギッセルスは、その著書『ソリチュードの娘たち』*Filles de Solitude* (1996年)のなかで、シュヴァールツ＝バルト夫妻の作品群における母系の系譜について論じている。ギッセルスは、夫妻の作品には、正統な婚姻関係によらない子どもが生まれ、母に遺棄される子どもがいる一方、生物学上の母の欠如を埋め合わせる存在として、孫を養育する祖母が描かれていることを述べている⁹⁾。また、『奇跡のテリュメ』とジーン・リースの『サルガッソーの広い海』*Wide Sargasso Sea* (1966年)を対象にした、ロニー・スカーフマンの研究では、両テキストの「母親化」とその内面化が論じられている。スカーフマンによれば、「母親の姿は、最初の外的な鏡であり、やがては内面化され、女兒は自らのアイデンティティを見出すために母をのぞき込むようになる¹⁰⁾」という。スカーフマンは、さらに、主人公を養育する祖母の存在が、主人公の自我の形成に極めて重要な役割を果たしていることを繰り返し述べている。しかし、母に代わって子どもの養育を担ったのは、何も祖母だけでない。大辻都によれば、『奇跡のテリュメ』の舞台となるカリブ海世界では、近代的な家族制度が成立せず、「カーズ case」と呼ばれる移動可能な小屋や庭に集まる緩やかな集団で、血縁家族に依らない疑似家族を形成していたのだという¹¹⁾。さらに風呂本惇子は、女主人公テリュメが学ぶ、共同体における女性どうしの関係について、「コミュニティの女たちは幸せな者を妬んだり批判したりはするが、誰かが朽ち果てそうなときには精一杯の支援を送る。この連帯が人を生き延びさせるのだ¹²⁾」と論じ、血縁以外の女性との連帯の可能性を示している。西成彦は、シモーヌと同年代のグアドループ出身の女性作家、マリーズ・コンデの作品の魅力を、「『性関係の可能性に無限に開かれた性』と『夫であれ子であれ姉妹であれ主人であれ同性の友人であれを子どものようにいたわり、養育する性』の交わる点にこそ『女性』を見出すこと¹³⁾」だと論じている。シモーヌの『奇跡のテリュメ』もまた、他者をわが子のように慈しみ、養育する点においては、コンデ作品と共通している。『奇跡のテリュメ』に関する先行研究では、祖母や共同体の人びととの連帯の可能性が示されてきたが、本稿では、養育を通じた女性どうしの関係が、主人公の自己肯定にどのように結びつくのかに主眼をおき、その「シスターフッド」の関係の可能性を探りたい¹⁴⁾。同時に、作品の舞台となるカリブ海のポスト奴隷制社会が、人びとをいかに抑圧し、一方でそれを乗り越えるための知恵が女性たちの中でいかに継承されていたのか、テキストの読解を通して明らかにしたい。

1. 母になるとは

「女性の自己実現のために、母になることは必要か¹⁵⁾」という問いが存在する。腹を痛めて出産し、授乳して、子どもを育て上げることは、一人の女性として生きること不可欠なのだろうか。『奇跡のテリュメ』のルガンドゥール家の女系一族は、娘を産んでその系譜を維持してきた。それでは、子どもを持たない女主人公には、どのような人生が待ち構えているのだろうか。

母の出奔後、祖母が代わりに主人公を育て上げ、祖母の人生訓が主人公の後半生の糧になるというプロットは、ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』*Their Eyes Were Watching God* (1937年)にもみられる。しかも、両作品の主人公は、いずれも子をなさないのである。

『ソリチュードの娘たち』のギッセルスは、シュヴァルツ＝バルト夫妻の作品における母系の系譜が、「母親の入れ替え」に象徴される形で維持されることを述べながら、その文学的効用について、次のように論じている。彼女によると、母は「権力のスポークスマン」であり、「したがって、女性の主体は、植民地の秩序の陰謀家であろうが、疎外のシステムへの反逆者であろうが、母から自らを切り離さなければならない¹⁶⁾」のだという。そのような「生物学上の母親の欠如」の埋め合わせをする存在として、献身的な祖母の姿が描かれているというのだ¹⁷⁾。

「ばあやNanny」と呼ばれる『彼らの目は神を見ていた』の祖母は、作中を通してその名前が明らかになっていないのだが、奴隷制時代から奴隷解放後も、白人の屋敷で女中として働き、白人主人の子ども達同様、孫娘のジェイニーを育てている。この小説は、女主人公のジェイニーと女友達フィービーの会話形式でストーリーが展開し、パートナーとの会話文から、ジェイニーの生涯が詳らかにされるしかけになっている。本文中には、黒人口語表現・表記（主語IをAh, theyをdeyと表記するなど）が使用されている。

ここで注目したいのが、ばあやと孫娘ジェイニーの会話である。彼女たちの間では、奴隷制時代からの隷属状態や女性に負わせられてきたジェンダー役割について語られている。ばあやは、白人主人に強かんされたうえ、混血児（主人公の母リーフィ）を産むと、嫉妬に狂った女主人に虐待されたのであった。「高いところから、黒人女の生き方について大説教をぶちたかった¹⁸⁾」というばあや。ばあやの「大説教」とは、主人の子ども達、失踪した娘のリーフィ、そして孫のジェイニーを養育してきた人生の憤懣でもある。黒人の口頭伝承を収録した、ハーストンの人類学者としての著作『騾馬とひと』*Mules and Men* (1935年)の一節も想起させる形で、ばあやの「大説教」は、孫娘のジェイニーだけでなく、私たち読者にも向けられている。

あのねえ、わたしに言わせれば、白人はあらゆるものの支配者なんだよ。黒人が権力を握っている国は、ずっと遠くの海のどこかにあるかもしれん。だけんど、わたしちゃ自分の目で見たものしか知らない。白人は荷物を投げ落として、それを拾え、って黒人の男に言うんだ。男は、言われた通りにするんだ。そうしなくちゃならないからね。だけんど運ばない。黒人の女たちに荷物を手渡すんだよ。わたしの見るかぎり、黒人の女はこの世の騾馬だね。わたし、おまえがそんなふうにならないようにとお祈りしてきたんだよ。ああ、主よ、神様¹⁹⁾！

このように、ばあやの「大説教」は、黒人女性が、白人による支配に加え、さらに黒人男性によって虐げられる理不尽を非難している。娘リーフィをもうけ、自身が妊娠可能な身体であることをばあやは認識していたが、夫に自分の連れ子を虐待されることを恐れ、そのいいなりになることを嫌って、一度も結婚していない。しかし、娘の蒸発後、ばあやは、孫娘にだけは経済的不自由のない、苦勞のない結婚をさせることに奔走する。

他方、『奇跡のテリュメ』の主人公は、どのような結婚生活を送ったのだろうか。年頃になったテリュメは、幼馴染のエリーと暮らし始める。しかし、そのエリーは、今ならばドメスティック・バイオレンス（DV）と呼ばれるであろう、手ひどい暴力でテリュメを打ち、賭博や酒、浪費に耽溺する。マリーズ・コンデの、グアドループとマルチニックの文学作品や口頭伝承にみられる人種やジェンダーのステレオタイプについて考察した博士論文では、『奇跡のテリュメ』も取り上げられている。コンデは、エリーの家庭を顧みない自他虐的な言動こそ、カリブ海の「去勢された」男性のステレオタイプを体現していると指摘している²⁰⁾。コンデのいう「去勢された男」とは、「奴隷貿易と抑圧に苦しめられ、一人前の大人としてではなく子ども扱いにされ、去勢され、男らしさを否定されて²¹⁾」いた黒人の男たちを指す。捨て鉢な生き方をし、家庭を顧みることもないエリーは、「去勢された」黒人男性の典型として描かれる一方で、そんな彼に惹かれる女性、レティシアが登場する。

私の可愛い子ちゃん、あんたはエリーにとって、あこがれのサトウキビなのよ。だけどあんたは自分の蓄えている汁で彼をいつも満足させているかしら？あんたの味に嫉妬しているわけではないけど²²⁾。

レティシアは、少女時代からエリーを慕っており、女主人公に彼を性的に満足させているのかを問うレティシアの挑戦的な言葉は、テリュメに呪いのようにつきまとう。

コンデの作品群において、性描写がしばしばみられるのに対し、シモーヌは、性について沈黙を守っている。「不感症」や「多感症」といった性的満足の有無は、パートナーと過ごす寝室だけの問題で済まされるが、不妊という体質は、家族をも巻き込む。テリュメの生涯を語る上で看過できないのが、彼女の不妊体質である。『彼らの目は神を見ていた』の祖母ばあやが、孫娘ジェイニーの幸せな結婚のために心血を注いだように、『奇跡のテリュメ』の祖母もまた、女主人公テリュメが健全な家庭を持てるよう導く。また、祖父母の良好な夫婦関係は、養育を基盤として成り立っていた。祖母トゥシーヌは、エリーとの関係に悩む主人公に対し、早期の離別を勧めているようにも捉えられる次のような発言をする。

テリュメ、私のクリスタルガラスや、いま私が髪をほどいているように、お願いだから、彼[エリー]の人生からおまえの人生も引きはがしほどいてくれないものかね²³⁾。

様々な苦難を経験してもなお夫と安定的なパートナー関係にあった祖母は、テリュメを幸せにする男性がエリーではなくアンボワーズであることを予見する。養女ソノールはというと、テリュメの同棲相手で、養父的存在のメダールによって拉致される。彼が養女に過度な愛情を

注いで甘やかし、ついにはかどわかす一連の行動をみると、養女を性的対象としていたのではないか。不妊体質の主人公は、祖父母の健全な関係をモデルに、養女ソノールを育てていたが、皮肉にも娘は同棲相手に奪われ、その疑似家族もついには離散してしまう。テリュメは、祖母や魔女との共同生活のなかで、変身術も習う。しかし、悪魔祓いや他の妖術は習得できたが、変身だけはどうしてもできないのだ。変身術がまさしく伝授されている場面をみてみよう。

しかしながら、彼女[マン・シーア]がまさしく変身術のコツを私に明かそうとする度に、何が私をそのままにし、二つの乳房を持つ女である私の姿を、獣や空飛ぶスクニャン[伝説上の生き物の一種]に取り換えるのを妨げ、そこで私たちはやめたのだ²⁴⁾。

このように、主人公テリュメが変身術を習得できないことは、他の動物に姿を変えられないということ以上に、一人の女性として子を宿し、母になるという変身が遂げられないことを示している。既に11人の子を抱えた母親に中絶を依頼されるも、処置を受けた後に死なずに生まれた子こそ養女ソノールであり、不妊体質のテリュメと、生命力の強さを象徴するソノールの姿は、対照的なものとして描かれている。つまり、主人公テリュメは、生物学上の子であれ養女であれ、子どもを養育し、母になるという試みは、失敗しているようにみえる。しかし、西が述べているように、女たちが養育する対象は、子どもだけに限らない。

ここで、テリュメの身体について不満をもらす、エリーについて考えたい。エリーはテリュメに対し、「おまえの乳房は重たくて、胎は深いのに、この世で女であるということが何を意味するのか分かっていない²⁵⁾」という。これには若干ニュアンスの異なる次のような意味が込められている。一つは、「女は男に従属すべき存在であるのに、おまえはそうでない」という非難である。これは発言したエリーと、彼のようなカリブ海世界の男尊女卑的な考えの表れだといえる。二つ目は、「おまえは女としての性的な喜びを知らない不感症だ」、「おまえは子どもを持たない不妊体質だ」というテリュメの生殖機能に対する揶揄である。彼は、「おまえの乳房や胎は成熟しているのに」と発言しているので、後者の解釈の方が妥当だろう。ライバルのレティシアが冷やかした、不感症という寝室の問題だけでなく、テリュメの不妊体質もまた、エリーとのパートナー関係で問題となっていることがわかる。『奇跡のテリュメ』に使用されるアレゴリーを研究した論文のなかで、大辻都は、エリーのこの発言を取り上げて、テリュメの不妊をとがめているようにも解釈できると述べている²⁶⁾。「私は母親が子どもの世話をするように、エリーの世話をした²⁷⁾」というテリュメは、パートナー関係にあるはずのエリーに対して「母親化」するのである。

このように、主人公の不妊体質ゆえに子どもをなさず、養女を迎えても一家離散する『奇跡のテリュメ』には、いったいどのような文学的救済が残されているのかという問いが浮上する。それでは、作品の舞台となるポスト奴隷制社会のグアドループにおいて、抑圧された人びとは、いかにして生き延び、生きるための知恵はどのように内面化されていったのだろうか。

2. 奴隷制の記憶

グアドループを舞台とする『奇跡のテリュメ』には色濃く奴隷制の残滓がみられる。日本になじみの薄い、グアドループという小さなこの島について、ここで簡単にその「歴史」を概観しておきたい。

1493年にコロンブスによってグアドループは「発見」されるが、金が産出されないことを理由に、スペインは撤退。1635年以降、フランスはこの島を植民地化し、先住民を「一掃」した後、黒人奴隷制を布く。1789年にはフランス本土で、身分の格差を解消するフランス人権宣言が採択された。黒人は人権の適用外とされていたが、カリブ海の白人入植者たちは、このような動きが植民地にまで波及することを恐れていた。他方、カリブ海の黒人たちは、人権が白人に限定されていることに反発していた。一時期イギリスの介入を受けるが、フランスは、奴隷解放を約束して黒人を懐柔し、イギリスを駆逐する。1794年、フランスの植民地では奴隷制が廃止されるが、白人入植者たちはこれに反発し、実際には奴隷の密貿易が横行していた²⁸⁾。1802年、ナポレオンによる奴隷制復活の命を受け派遣されたフランス軍に対し、グアドループでは、マルチニック出身で混血のルイ・デルグレスを中心とした反乱が散発的に起きた。女性たちも弾薬を運び、怪我人の治療をするなどして反乱の後方支援に携わっていた。また、反乱を率いた英雄の一人である混血女性ソリチュードの存在については、永らく忘れられていた。反乱はフランス軍によって鎮圧され、1802年5月、奴隷制は復活する²⁹⁾。フランス領で最終的に奴隷制が廃止されるのは、1848年になってからだった。しかも、その奴隷制廃止後も依然としてフランスの植民地であったグアドループは、1946年にフランス本土と同等の地位が約束された「海外県」となった。海外県化後も、食料や日用品をフランス本土からの移入に頼っているために、物価が高く、本土との経済格差にあえいでいるのが現状だ³⁰⁾。

主人公テリュメは、1848年の奴隷制廃止後からかなり経ってから生まれているので、幼少時代には、奴隷制のことを十分理解していなかった。祖母や魔女マン・シーアに向かって、「奴隷」や「主人」が何者であるのかを尋ねたりもするテリュメであったが、やがて今なお黒人が白人によって支配されていることを知るにいたる。幼少時代、さとうきび畑で働く黒人を目の当たりにしたときのことを、テリュメは次のように回想している。

奴隷制は、フォンゾンビ [= 集落の名前] に今も2、3人はいるような、はるか昔の人びとがやってきた国の、外国のことなんかではないのだと、生まれて初めて感じた³¹⁾。

このように、奴隷制があまりなじみのない、過去の遺物のように感じていたテリュメも、祖母やマン・シーアとの対話を通じて、彼女たちの暮らすグアドループの「そう遠くない昔」から続くものであると次第に理解するようになる。マン・シーアは、奴隷や主人が何たるかについて、次のようにテリュメに教える。

もし奴隷が見たければ——彼女は冷たく言った——ボワンタピトルの市場へ降りて行って、かごの中で縛り上げられて、恐怖に慄く目をした家禽を見さえすればよい。そして、おま

シモーン・シュヴァルツ＝バルト『奇跡のテリュメに雨と風』におけるシスターフード（大野）

えが主人とは何か知りたければ、ガルバにある、ベルフィーユ農園のデザラーニュ邸に行けばよい、彼らは、末裔に過ぎないが、それでも見当がつくだろう³²⁾。

子どもに対し、未知の事物や世界について教示することもまた、養育を担う年長の者にとって重要な役割の一つである。祖母やマン・シーアは、奴隷制の残滓が身近にみられるものであるとテリュメに説く。しかし、祖母の病気により現金収入が必要になったテリュメは、「悪魔より怖い」と恐れられるさとうきび畑で働いたり、奴隷の脾臓を破裂させた残酷な祖先を持つ、デザラーニュ邸という白人の屋敷で、女中奉公することになる。しかし、祖母は、白人の下でテリュメが働くことについて反発をみせる。テリュメのさとうきび畑での労働を嘆き、祖母トゥシーヌは、次のように言う。

私の小さい太陽や、なぜおまえの16歳を、甘いお菓子のように親方に差し出ししたりするんだい？それが何と、どんな素晴らしいものと引き換えになるというんだい³³⁾。

小説には、初めてのさとうきび畑での労働にまごつくテリュメの面倒を見、食べ物を分け与えてやる古参の女性労働者オリンピアも登場する。オリンピアは仕事の内容を教えるだけでなく、テリュメを自宅にも招いて余暇をともに過ごしている。また、熱心なキリスト教徒でもあるオリンピアの影響で、テリュメも教会に行ったりもした。さとうきび畑での労働は過酷ではあったが、先輩のオリンピアと後輩のテリュメの間に、シスターフードと言えるような師弟関係や友人関係が存在していたのである。しかし、テリュメの次の職場、デザラーニュ邸は、事情が違った。

マン・シーアの発言によると、デザラーニュ邸は、奴隷制時代から続く白人主人の家系であることがわかる。デザラーニュ邸で職を求める際には、祖母も付き添っていたが、テリュメは祖母と離れ、屋敷で女中として住み込みで働く。屋敷では、主人一家と使用人という区別の他に、使用人にもヒエラルキーが存在し、それに応じて部屋割りがなされていた。当然、仮雇いの新参女中であるテリュメは、底辺の地位にある。そんな境遇にあったテリュメは、彼女があたかも存在していないかのように扱われる。祖母にとって、テリュメは、「クリスタルガラス」という呼びかけに象徴されるような、もろくてかけがえのない存在なのだったが、一步家庭の外に出て、女中という一労働者になるや否や、他者と置き換え可能な存在になってしまうことが描かれている。

デザラーニュ邸において、夫人がテリュメを労働者として酷使する一方、男の主人であるデザラーニュ氏は、テリュメを強かんしようとしさえする。主人は、夜中テリュメの部屋に忍び込み、「ドレス一着じゃ足りないってのか？おまえは金の鎖や2個の指輪が欲しいのか³⁴⁾」と言いながら、絹のドレスをテリュメに投げつけ、彼女の服を脱がそうと迫る。さいわいにも、テリュメは脅しを用いて強かんはまぬがれた。このように、労働者として、あるいは性的搾取の対象として酷使しようとするデザラーニュ邸での女中生活を乗り切る上での精神的支柱の役目を果たしたのが、祖母や魔女の教えだった。とりわけ祖母の「馬におまえを連れて行かせるのではなく、おまえが馬の手綱を引くんだよ³⁵⁾」という言葉が、屋敷での過酷な労働の下でも、自尊

心を保つのに役立ったと考えられる。

しかし、テリュメをデザラーニュ邸の哀れな女中としてみるのは一面的だ。仕事のない日曜日には祖母のいる村へと帰り、屋敷での生活をネタに、村人相手に話す女丈夫な一面も持ち合わせている。16歳という多感な時期に、家族や恋人と離れて女中奉公していたテリュメだが、夫人に一方的に暇を言い渡され、そんな女中生活も終わりを迎える。

ところで、商業的な成功を取めた『奇跡のテリュメ』であるが、この小説には、主人公の政治的な抵抗が少しも描かれておらず、「宿命論的」だという批判があった³⁶⁾。そんなテリュメとは異なり、彼女の二番目のパートナーであるアンボワーズは、いわゆる「抵抗者」であり、一種の「英雄」として描かれてもいる。若い頃、白人憲兵を襲い投獄された彼は、自らを白人化しようとフランス本土に渡る。7年間の本土滞在中、白人の視線にさらされたアンボワーズは、自分が黒人であることを否定なく自覚させられ、疎外を味わう。このような、白人の好奇の視線による疎外は、まさしく前述のファノンやシモーヌのようなカリビアンが経験した実体験ではなかったか。失意のうちにグアドループに帰郷したアンボワーズは、白人を襲いたくて仕方ない衝動にかられるが、それは自らの隷属状態——ファノンはそれを「劣等コンプレックス」と呼んだが³⁷⁾——をまたしても暴力的に解消しようとする心理の表れだといえる。彼の帰郷後、グアドループの製糖工場ではストライキが起こり、労働者代表としてアンボワーズが担ぎ出される。彼は、工場側との交渉に奮闘するにもかかわらず、その最中事故死する。しかし、「英雄」・アンボワーズが非業の死を遂げたその場所で、わずか2スーの賃上げの結果、人びとは労働を再開し、彼の奮闘は無駄骨であったかのような印象をうける。

『『奇跡のテリュメに雨と風』における政治的位置付け』と題したジャンヌ・ガラヌの論文は、小説において、奴隷制時代の精神的疎外や搾取のシステムがいかにして残存し、集合的な不条理の経験として描かれているのか論じている³⁸⁾。この作品において、「政治参加」型の抵抗はあまり重要でないし、機能していないというのである。

アンボワーズが、白人憲兵を襲い、あるいは労使交渉の代表として、ポスト奴隷制社会においてもなお白人の牛耳る不条理と闘う一方、テリュメは過酷な労働を、祖母や魔法の教えを精神的支柱として耐えようとする。二人の世界に対する態度を対照的に描くのが、この小説の特徴といっても過言ではない。例えば、デザラーニュ邸で夫人に罵倒されても、「私は他のことについてなんも知りません。私はただの青くて黒い黒人女で、私は洗濯してアイロンがけしてベシャメルソースを作る、それがすべてなんです³⁹⁾」と言い、黒人女性としての従属性を理由にして夫人の怒りの矛先をかわそうとする。しかし、この言葉は彼女の本心から出た言葉ではない。というのも、夫人に罵倒されている間じゅう、マン・シーアの教え、「頑強な黒人女におなり、両面のある本物の太鼓にな、この世は打たれたり叩かれたりだが、下の面はいつも無傷のままにさせなきゃならん⁴⁰⁾」という不遇な現実の中でも不屈の精神を保てという教訓がテリュメの脳裏をよぎっているからだ。過酷な女中生活は、祖母や魔法の教えを内面化しつつ、「馬におまえを連れて行かせるのではなく、おまえが馬の手綱を引くのだ」という言葉に表されるような、主人公の成長の物語として読み替えられる。

テリュメは、祖母と魔法との共同生活のなかで、ポスト奴隷制時代を生き抜くための知恵に加えて、妖術の知識も授かった。それらが彼女にとっては生きる力となったのである。それでは、

養女を奪われ後裔を失ったテリュメの内に蓄積された知恵は、ルガンドゥール家の系譜とともに途絶えてしまうことになるのだろうか。

3. 知恵の継承

ベトナム出身のフェミニストであるトリン・ミンハは、隷属を強いられてきた第三世界の女性の語りがどのように継承されてきたのか、その著書『女性・ネイティブ・他者』*Woman, Native, Other*（1989年）のなかで論じている。彼女によると、「邪術は母系家族にだけ遺伝」し、「男が邪術師（魔法使い）になるのは、女邪術師（魔女）から力を伝授されたときのみ」であるという⁴¹⁾。

『奇跡のテリュメ』において、アンボワーズが、「運動家」として、奴隷制に続く植民地体制に異議申し立てを行う人物として描かれていることは既に述べた通りだが、他方、テリュメはというと、祖母や魔女の教訓を胸に秘めながら過酷な労働に従事していた。年老いてからのテリュメは、今なおおびとの苦しむ現実を正確に理解しようとする。そして、ランプを片手に、奴隷だった祖先の幻を見て、今度は後世の人びとに、抑圧の連鎖を断ち切ることはできないかと考えもする。晩年のテリュメは、奴隷制について、例えば次のように語る。

そして、この世には不正義があるということについて、奴隷制が終わり忘れられた後も、私たちが苦しみながらひっそりと死んでいくことについて、私は考える⁴²⁾。

奴隷制に関するテリュメの告白は、トリンの記した女（祖母）から女（孫娘）へと継承される「おばあちゃんの物語」の一節を想起させる。

私は、鎖のようなこの継続のなかの一つの輪にすぎない。その物語は私であって、私でなく、私のものでもない。実際、それは私に属するものではなく、その責任を大いに感じているときでさえ、伝達の過程で得られる喜びに無責任に浸っていられる。複製する楽しみ、再び作る楽しみ。繰り返しは同じものにはなりえないが、私の物語は、彼女たちの物語や彼女たちの歴史を運び、私たちの物語は、たとえそれをあくまで否定しようとも、無限に繰り返していくのだ⁴³⁾。

トリンの「おばあちゃんの物語」は、老女ファノットから聞いた物語を、作者シモーヌが、複製し、再び作る楽しみ、そしてそれがさらに繰り返される喜びと、ぴったりと重なる。

晩年のテリュメは、エリーの安直でむしのいい黒人女性像とは異なる、「鎖のようなこの継続のなかの一つの輪」となって、奴隷制の残滓を断ち切る黒人女性として生きることを意味を見出すのである。それは、デザラーニュ邸での過酷な女中生活の中で生まれた黒人女性としての自己意識の萌芽が、晩年になって結実したものだといえる。

前述したように、祖母と魔女との共同生活で人生訓や妖術を学んだテリュメであったが、変身術だけは習得できなかった。これは、何を意味しているのだろうか。『奇跡のテリュメ』にお

いて、葉草や妖術を使う人びとは、畏敬の対象である。しかし、変身術があやつれるのは、魔女のマン・シーアただ一人であり、変身術は、共同体の人びとにとって、崇敬の対象にはならない。むしろ、変身術を持つと噂されるマン・シーアは、人びとにとって恐怖の対象である。友人の孫テリュメに初めて会ったマン・シーアは、次のように言って子どもを脅かす。

子どもや、なんで私をそんな風に見るんだい？犬、蟹、蟻に変身する方法を教わりたの
かい？今日からでも人間とは距離をおいて、人間どもを竿にずっとひっかけておきたいの
かい⁴⁴⁾？

隣人であり、エリーの父親でもある雑貨店主「アベルの親父」は、大きな鳥に化けたマン・シーアに、かぎ爪で腕を傷つけられたとテリュメに話し、その傷跡を見せる。マン・シーアが黒い犬に化けるといふ噂もある。しかし、マン・シーアの友人である祖母トゥシーヌの見方は人びととは異なる。アベルの親父から噂話を伝え聞いたテリュメに対し、祖母は次のように諭す。

確かにマン・シーアは神様が彼女に授けてくださった人間の姿に満足できないのだよ、彼女
はどんな動物にも変身する能力が備わっている⁴⁵⁾。

作品において、マン・シーアは、変身術だけでなく、植物相や動物相、交霊や祈祷など、日常生活を送る上で有益な知に通じた人物として描かれており、邪悪な存在ではない。それにもかかわらず、彼女は共同体の人びとから忌避されている。悪魔祓いや占いといった、人間の暮らしに役立つ類の術は必要とされるが、人間の力を超越した変身術は、気味悪がられ、人間と魔女を分かちものとして描かれている。また、黒い犬に変身したマン・シーアにテリュメは気づくが、黒い犬に変身する理由を、「キリスト教徒でいるより犬の姿でいるほうがまし⁴⁶⁾」だからと答えている。このように、魔女マン・シーアは、近代西欧的価値観を転覆させるような存在となっていることがわかる。テリュメがどんなに熱心に指導を受けても変身術を習得できないことは、彼女の魔術の限界を示している。マン・シーアの言葉に従えば、キリスト教に対する許容度が異なることも関係しているようだ。

しかし、主人公テリュメに変身術を授けないことは、意外な効果をもたらした。彼女の存在は、読者により親近感を与えることになったのである。『ソリチュードの娘たち』のギッセルスは、副題「シモヌ／アンドレ・シュヴァルツ＝バルトの架空的自伝におけるアンティルのアイデンティティに関する試論」にもみられるように、シュヴァルツ＝バルト夫妻の作品群を、一種の架空的自伝として読み解こうとした。ギッセルスは、次のように記している。

女性小説が伝記の枠組みの外に危険を冒すのはめったにないと同様、女性の登場人物が
(新)植民地主義の社会における女性の運命を体現している。それゆえ、テリュメ・ルガン
ドゥールの運命は、多くのアンティル女性のそれであり、彼女の生き方は、アンティルの
共同体にあてはまる⁴⁷⁾。

だからこそ、この小説のラジオ放送を聞いた、グアドループの文字の読めない女性たちは、彼女自身の家族の物語が語られていると感じたのではないか⁴⁸⁾。家庭内においてはパートナー関係の破綻が、他方、社会の中では、搾取され、隷属を強いられる黒人女性の姿が描かれている。読者と同様、変身ができない主人公テリュメに対し、人びとは、彼女たちと同じ現実世界に生きる人間として同一化できるのである。主人公が変身術を習得できないことは、一つの象徴的なことを示している。すなわち、テリュメが「人間の女の姿以外になれない」ことは、彼女の抱える諸問題を、生身の人間として解決しなければならないことを意味している。例えば、パートナーを奪われてしまうような、魅力に欠けた人物として生き、不妊体質や性的搾取の対象になりやすいという問題にも直面する。テリュメは、これらの問題を、読者には不可能な、変身という一足飛びの手段に依らず、地道に解決しようとするしかないのである。他方、変身可能な魔女マン・シーアは、失われつつある非近代西欧的価値観を象徴する人物として描かれているのである。

おわりに

『奇跡のテリュメ』における疎外について論じたジャンヌ・ガラヌによると、「奴隷制の疎外の傷跡をこらえるような、ネガティブなことわざを組み込むことにより、『奇跡のテリュメに雨と風』は、その宿命論を通して、集団的カタルシス、古い宿命論の悪魔祓いを行っている⁴⁹⁾」のだという。奴隷制の記憶を後世の人びとに伝え、抑圧の連鎖を止めようとするテリュメの試みには、かつて彼女が祖母や魔女から知恵を教わったように、年長の者から年下の者の間で、知恵と語りが再生産される。他者を誰でも自分の子のように慈しむ、シスターフッドという「文学的救済」が残されているからこそ、『奇跡のテリュメ』は、悲劇としてではなく、読者に希望が託された小説として読めるのである。

バルガス・リヨサは、創作行為と自身の関係を次のように記している。

小説を書くという行為は、つねに自己回復と悪魔祓いの試みである。現実と折り合いの良くない人間が、その記憶のなかに生き永らえて今や悩みの種となったオブセッション、それからの解放を願うデーモンと化したある基本的な個人的体験を、いっきに死から救おうとする行為である⁵⁰⁾。

リヨサの言葉には、パリでの疎外体験を契機に、黒人としての自己を発見し、創作に導かれたシモーヌの姿を見て取れる。ギッセルスは、「家族の不在は、アイデンティティの脆弱さと相関し、民族共同体の土台から崩す⁵¹⁾」とし、現実のアンティル人のメンタリティを述べている。父の不在や母の出奔は、しばしば作品のテーマとなってきた。ところが、作品世界においては、主人公からあえて母を奪うことで、血縁だけに依らない、誰をもわが子のように育てるシスターフッドの関係が、主人公の成長を促すものとして描かれているのである。そして、作品のなかのシスターフッドの在りようを、身近な人物との関係に照応させて楽しむことができたからこそ、『奇跡のテリュメ』は広く受容されたのだと考えられる。

他者をわが子のように慈しむ、シスターフッドの関係は、他のカリブ海文学にもみられる重要なテーマである。その柔軟性ゆえ、読者は、物語と現実を行き来し、女主人公の家族や女友達にだってなれるのだ。その物語もまた、再話がなされる度、「輪のように」引き継がれていく。

注

- 1) Simone Schwarz-Bart, *Pluie et vent sur Têlumée Miracle*, London, Bristol Classical Press, 1998, p. 1. 本論文はこの版を使用した。以降、引用部の翻訳は、指示なき場合は筆者による。
- 2) Alfred Fralin and Christiane Szeps, "Introduction" in *Pluie et vent sur Têlumée Miracle*, London, Bristol Classical Press, 1998, pp. vii–viii.
- 3) *Ibid.*, p. viii.
- 4) フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、1998年、129頁。
- 5) Fralin and Szeps, *op. cit.*, pp. xiii–xiv. Bridget Jones, "Introduction" in *The Bridge of Beyond*, London, Heineman, 1982, pp. xv–xviii. 西成彦「アンティールと女性作家たち」『越境するクレオール——マリーズ・コンデ講演集』マリーズ・コンデ、三浦信孝編訳、岩波書店、2001年、71–80頁。
- 6) Fralin and Szeps, *op. cit.*, p. x.
- 7) *Ibid.*, p. ix.
- 8) Mariella Aïta, *Simone Schwarz-Bart dans la poétique du réel merveilleux : Essai sur l'imaginaire antillais*, Paris, L'Harmattan, 2008, p.44.
- 9) Kathleen Gyssels, *Filles de Solitude : Essai sur l'identité antillaise dans les (auto-) biographies fictives de Simone et André Schwarz-Bart*, Paris, L'Harmattan, 1996, pp.61–76.
- 10) Ronnie Scharfman, "Mirroring and Mothering in Simone Schwarz-Bart's *Pluie et vent sur Têlumée Miracle* and Jean Rhys's *Wide Sargasso Sea*," *Yale French Studies*, No. 62, 1981, p. 89.
- 11) 大辻都「クレオールのアレゴリー、自己翻訳、名づけの拒否——シモーヌ・シュヴァルツ＝バルト『奇跡のテリュメに雨と風』」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第13号、2004年、221, 230–231頁。
- 12) 風呂本惇子「もうひとつの世界を知る女たち—シモーヌ・シュヴァルツ＝バルトの描くグアドループ」『黒人研究の世界』黒人研究会編、2004年、348頁。
- 13) 西、前掲書、79頁。
- 14) 伊田久美子「シスターフッド」『岩波女性学事典』井上輝子他編、岩波書店、2002年、171–172頁。マギー・ハム「シスターフッド、姉妹関係」『フェミニズム理論辞典』木本喜美子・高橋準監訳、明石書店、1999年、306–307頁。
- 15) 上野千鶴子『新装版 女という快楽』勁草書房、2006年、104頁。
- 16) Gyssels, *op. cit.*, p.65.
- 17) *Ibid.*, p. 63.
- 18) ゴラ・ニール・ハーストン『彼らの目は神を見ていた』松本昇訳、新宿書房、1995年、28頁。
- 19) ハーストン、前掲書、25頁。
- 20) Maryse Condé, *Stéréotype du noir dans la littérature antillaise Guadeloupe – Martinique*, thèse pour obtenir le grade de Docteur de l'Université Paris III, 1976, pp.124–145.
- 21) マリーズ・コンデ「女たちの言葉」元木敦子訳、前掲『越境するクレオール』56頁。
- 22) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p.77.
- 23) *Ibid.*, p.89.
- 24) *Ibid.*, p.110.
- 25) *Ibid.*, p. 88.

- 26) 大辻, 前掲書, 225-226 頁。
- 27) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p. 76.
- 28) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院, 2002 年, 28-44 頁。
- 29) Bernard Moitt, *Women and Slavery in the French Antilles, 1635-1848*, Bloomington, Indiana University Press, 2001, pp. 125-174. Bernard Moitt, "Slave Resistance in Guadeloupe and Martinique, 1791-1848," in *Caribbean Slavery in the Atlantic World*, Verene Sheperd and Hilary McD. Beckles eds. Kingston, Ian Randle Publishers, 2000, pp. 919-931.
- 30) 中村隆之『カリブー世界論——植民地主義に抗う複数の場所と歴史』人文書院, 2013 年。
- 31) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p. 32.
- 32) *Ibid.*, pp. 30-31.
- 33) *Ibid.*, p. 46.
- 34) *Ibid.*, p. 61.
- 35) *Ibid.*, p. 50.
- 36) コンデ, 前掲書, 65 頁。パトリック・シャモワゾー, ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』西谷修訳, 平凡社, 1995 年, 260-261 頁。これらは、『奇跡のテリュメ』を, 政治的抵抗の描かれていない「宿命論」として読む見方に異議を呈している。
- 37) ファノン, 前掲書。
- 38) Jeanne Garane "A Politics of Location in Simone Schwarz-Bart's *Bridge of Beyond*," *College Literature*, Vol. 22, Issue 1, 1995, p. 26.
- 39) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p. 52.
- 40) *Ibid.*, p. 32.
- 41) トリン・T・ミンハ『女性・ネイティブ・他者——ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳, 岩波書店, 1995 年, 220 頁。
- 42) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p.144.
- 43) トリン, 前掲書, 196 頁。
- 44) Schwarz-Bart, *op. cit.*, p.29.
- 45) *Ibid.*, p. 27.
- 46) *Ibid.*, p. 111.
- 47) Gyssels, *op. cit.*, p. 67.
- 48) コンデ, 前掲書, 65-66 頁。
- 49) Garane, *op. cit.*, p. 26.
- 50) M. バルガス・ジョサ「アラカタカからマコンドへ」『疎外と叛逆——ガルシア・マルケスとバルガス・ジョサの対話』寺尾隆吉訳, 水声社, 2014 年, 91 頁。
- 51) Gyssels, *op. cit.*, p.65.

